

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 60

学校名・団体名	岡崎市立緑丘小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	学習評価による学び続ける子供の育成

〈活動・研究の意義および活動報告〉

本校の子供たちは、授業に対して落ち着いてまじめに取り組むが、受動的である。また、教師側も、子供たちの学びに対する評価が十分でなく、個別の指導にも課題が残る。そのため、主体的に学び続ける子供の育成をねらい、子供のための学習評価による授業改善を目指した。

学習評価については、新学習指導要領において重要視されている。特に「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を伸ばしていくためには、子供自身が自らの学びを評価し、より良い学びにしていけるような指導が必要であるとしている。そこで、学習評価を明確にし、教師が行うだけでなく、子供が評価の観点とその基準（ルーブリック）を共有することにより、学び続ける子供の育成を目指し、授業の改善を進めていくこととした。

岡崎市教育委員会より委嘱を受け、平成32年度に研究発表を行い、市内外の教員に成果を公開する。

1 授業改善の基盤作り

(1) 関わり合い、発信する子供の育成を重視した教育実践の継続

ハンドサイン、話型の統一、ホワイトボード・マグネットボードの整備と活用、板書の構造化、座席の工夫、学びの足跡の掲示など、学びの環境整備を継続・発展を進めてきた。

(2) どの子供も、自分の意見を安心して意見が言い合える温かい学校、学級作り

- ・『まちガエル』『かんガエル』『みちガエル』になろう」を合い言葉に、間違いや失敗を許し合い、互いの良さを認め合い、大切にし合えるようにした。
- ・「いいですか」「いいです」というやりとりではなく、「同じことを言います」「途中まで言います」など、正解でない発言を大切にしたい取組を行った。

(3) 関わり合いのある朝のスピーチ

息の長い発言ができることをねらい、スピーチを継続して行った。その際、話し手は自分の経験を語ることに、聞き手は反応して聞き、質問をしないで自分の経験を続けて話すことなどをルールに行った。



【各学年に「助成金」で購入した
発表用ホワイトボードとボックス】



【「助成金」で購入した発表用ホワイトボード
を活用した授業】

2 授業研究

教師全員が一人一研究授業を基本として授業力向上に取り組んだ。

(1) 1学期 ルーブリックを取り入れた授業開始

45分の授業にルーブリックを組み込んだ授業を「6年 比とその利用」の単元で行った。

1学期の実践を通して、子供がルーブリックを作成し、振り返るために時間がかかりすぎることが問題となった。また、関わり合いの基盤となる発言の仕方などの学級作りも問題となった。さらに、教師用ルーブリックは、全ての観点が必要だが、子供用ルーブリックには、「思考・判断・表現」の観点のみで作成すれば、「主体的に学ぶ姿勢」「知識・技能等」も評価できることになることが確認された。



【助成金】で購入した学習課題用ボードとルーブリック提示用ボード】

(2) 算数科における授業研究

「出会い（導入）→課題・ルーブリック提示→見通し→自力解決→集団解決→振り返り」の学習パターン（緑丘モデル）が定着してきた。

「1年 3つのかずのけいさん」の授業では、「前へ出ます」と言い、黒板まで出向き、指示棒を指し示しながら自分の考えを発表する姿が見られた。

授業後の協議会では、本時のルーブリックと単元全体のルーブリックとのずれがあることや、見通しで時間を取りすぎると振り返りの時間が不足がちになることが指摘された。導入時における既習事項の意識付け、振り返り時にペアでの説明し合いで相手意識を持って何を説明しているか、評価し合っているかがポイントとなることが確認された。

(3) 国語科における授業研究

「2年 あなのやくわりを読みとこう」では単元後ルーブリックを子供とともに作り、本時でも子供の言葉から出た言葉を用いたルーブリックで授業実践を行った。

授業後の研究協議会では、学習課題やルーブリックB評価のことばは全員合格ラインの内容にすること、振り返りで書かせたい言葉は、「今日新しくできるようになったこと、分かったこと」であることが確認された。

(4) 助言者を招いての算数科「5年 図形の面積」特設授業研究

集団解決や振り返り時に、ルーブリックを再確認することが定着してきた。授業では、全員が発言することができた。また、発言の中に「前、図形の公式を求めるときに～」という過去の学びが表れるものもあった。スピーチの積み重ねはもちろんであるが、温かい学級経営と授業が結びついている表れでもあった。

授業後の研究協議会では、評価は子供の励みになるものでなければならぬこと、個によって評価が違っていても良いことなどを助言いただき、今後の研究の方向付けとなった。



【助成金】を活用して講師を招聘した研究協議会】

3 成果と課題

- ・第1時で単元後ルーブリックを、また毎時に授業後ルーブリックを示すことにより、やること（ゴールイメージ）が明確になるので子供が迷わずに取り組むことができる。
- ・授業の途中でルーブリックに立ち返る場を作ること、子供たちが授業でのがんばりどころを意識し、課題を解決していこうとする姿が見られる。
- ・ルーブリックの基準を「B評価をこの授業で全員が学ぶべきこと・できるようになること」にしたことで、教師がそれを達成できるような手立てを工夫している。
- ・振り返り時に、本時で学んだことをペアで話し合うこと（パフォーマンス評価）は、自己評価ができると同時に学びの定着させる場にもなる。また、子供たちは、自己評価により、自らの学びを振り返り、次の学習へつなげていこうと思いをもちることができた。
- ・ルーブリックを子供と教師と一緒に一緒に作ることが、本校の研究の最も大切な手立てだが教師主導の観は否めない。単元後ルーブリックと授業後ルーブリックの整合性もまだ検証不足である。
- ・ルーブリックを利用した振り返りのさせ方が確定していない。自らの学びを更新していけるような自己評価のさせ方、振り返る言葉の書かせ方を工夫していきたい。